

鳥取県地震防災調査研究委員会第1回被害想定部会の議事概要

1 開催日時 平成27年3月24日(火) 13:30~15:20

2 開催場所 県庁第2庁舎3階 災害対策本部室

3 議事

(1) 部会長の選任について

(2) 地震津波の防災に関する有識者に対して出席を求めることについて

(3) 山陰地方のひずみ集中帯について

(4) 前回委員会における指摘事項への対応方針について

(5) 深部地盤モデルおよび浅部地盤モデルについて

(6) 地震動の算出結果について

4 議事概要

○ 京都大学防災研究所の西村卓也准教授に有識者として出席いただき、山陰地方のひずみ集中帯について説明いただき、想定地震の設定について審議した。

○ 前回委員会(1/26)で決定した11の想定地震について、今回作成した地盤モデルを用いて地震動(震度等)の予測を行い概ね了承された。

○ 次の被害想定部会は、平成27年6月下旬に開催する。

(議事(3)に対する主な質疑応答)

○山陰で地震が発生する確率は分かるのか。

→発生確率や、次にいつ地震が発生するかは分からない。一年当たりのひずみ量を推計することはできるが、どれだけの強度に至ったら破壊するかは分からない。少しでも地震規模を推定できるように観測を強化している。

○ある断層でマグニチュード7クラスの地震が発生するのは、千年から数万年に一度といわれていることについて。

→千年から数万年単位と比べれば、GPSで今見えているのは瞬間最大風速のようなものではあるものの、年間4mmのひずみが1000年続けば4mになる。1回の地震で2~3mのすべりが生じることを考えると、地震の発生頻度は最大500年~1000年に一度のレベルになる可能性はある。

○本委員会では11の地震を想定しているが、これで十分か。

→ひずみ集中帯の観点からは、概ね網羅されていると思う。あえて言えば、ひずみ集中帯は東から西に続いていると考えられるので大山の下も検討した方が良いが、どこに断層を設定するかは難しいと思う。

→今回の地震被害想定では、「地表断層が不明な地震」に備えるため、県下全域での直下地震を想定することとしている。

(議事4に対する主な意見)

第1回鳥取県地震防災調査研究委員会の際に頂いた指摘に関し、対応方針を説明し概ね了承いただいた。

(議事5に対する主な意見)

地盤モデルについて、250メートルメッシュ内のボーリングデータが少ない場合、そのデータが250メートルメッシュを代表するものであるか検討すること。

また、同モデルの検証にあたって、地震観測記録を活用したシュミレーションが鳥取地域では困難であるため、実際に観測された卓越周期を合わせ込む等の手法で

間接的にモデルの妥当性を検証すること。

(議事 6 に対する主な意見)

「鹿野・吉岡断層」(S 1 8 鳥取地震) 及び「鳥取県西部地震断層」については、震度分布が実際に観測されたものよりもやや小さい地域があることから、震源断層モデルを精査すること。